

レヴァント回廊の歴史を探る

—第7次(2021年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査—

西山 伸一 中部大学人文学部教授

ジャンニ・アブドゥル=マッシーハ 国立レバノン大学文学人間科学学部芸術考古学科教授

Investigating the History of the Levantine Corridor: The Seventh Season (2021), the Excavations of Phoenician Port of Batroun, Lebanon.

NISHIYAMA, Shin'ichi Professor, College of Humanities, Chubu University

ABDUL MASSIH, Jeanine Professor, Department of Arts and Archaeology, Faculty of Letters and Human Sciences, Lebanese University

レヴァント回廊の歴史を探る—第7次(2021年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の発掘調査—

1. はじめに

「フェニキア」に関する考古学研究は、地中海沿岸地域、すなわち東はレヴァント地方から、西はイベリア半島にかけての範囲で近年目覚ましい展開を遂げている。しかし、フェニキアの本拠地であるレバノン沿岸部とその周辺地域では、イスラエル北部沿岸地域を除けば、新たな考古学的証拠の報告は停滞気味であった。そのような中、ヘレン・サーデル(Hélène Sader)が2019年に刊行した *The History and Archaeology of Phoenicia* (Atlanta, SBL Press) は近年立て続けに刊行されているフェニキア研究の概要書としては、唯一「フェニキアの本拠地」、すなわちレバノン沿岸部における最新の考古学研究をまとめたものであり、学界に大きな貢献をなしている。しかし、そこにはまだ調査が開始されたばかりのバトルーン遺跡の重要性は十分に言及されていない(e.g., pp.75~77)。バトルーン遺跡は、これまでフェニキア都市の存在が文献史料により推測されていたが、確固たる考古学的証拠に欠けていた。私たちの調査は、ピブロスからトリポリにかけての沿岸部において空白地帯であった鉄器時代都市の存在を明らかにしたのである。

2018年に始まった中部大学・レバノン大学合同調査団によるバトルーン遺跡の発掘調査は、コロナ禍にも関わらず、2021年も考古総局の許可のもと実施された。レバノンの新型コロナウイルス感染症は、2020年12月末から2021年3月に最初の大規模なピークを迎えたが、その後、感染が落ち着き、レバノン側関係者を中心として中断を挟みながら2021年3月24日から9月15日(I地区)、および9月22日から10月3

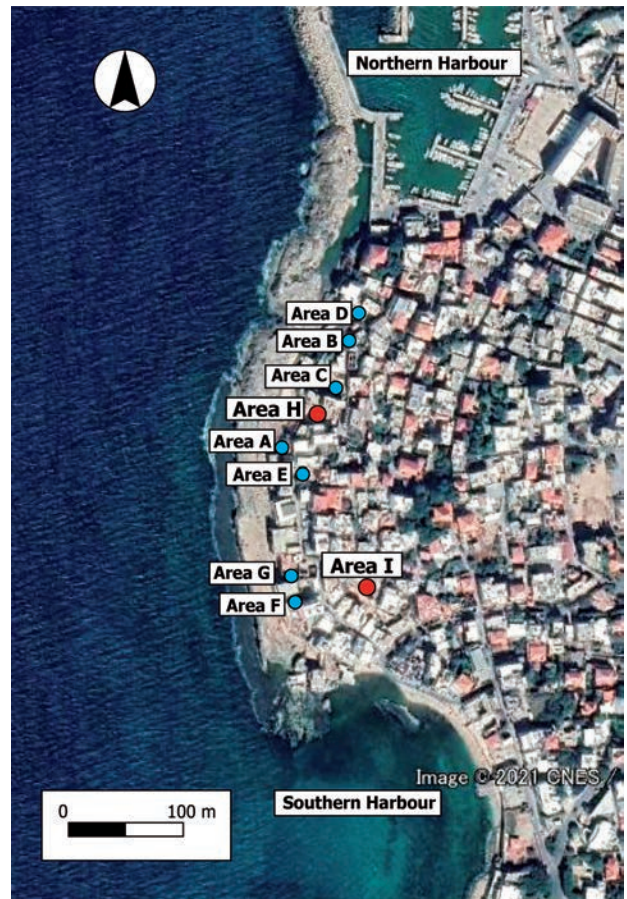


図1 バトルーン遺跡と調査地区の分布。南端にI地区、中央にH地区が位置する。位置する(Google Earthより作成)。

日(H地区)の期間で実施した(図1)。今シーズンの調査の主眼は、バトルーン遺跡の南端部分に位置する新たな調査区、I(アイ)地区であった。地区の規模は、南北約25m、東西約25mの約400m²を測る。一方、H地区は、2020年度に調査が実施されたが、開発事



図2 I地区で出土したオスマン朝時代の石組みで造られたシスターン(水槽)。ヴォールト天井をもつ最も大型のもの。

業にともない地区の北西部に位置する鉄器時代の石切り場跡で小規模な発掘調査が行われた。

2. I地区：19世紀からローマ時代の様相

この地区は、上述したようにバトルーン遺跡の南端部分にあたり、おそらくローマ時代の集落の南端に位置すると考えられる。このため、最下層の岩盤の上には、ローマ時代(後期)の建築遺構が発見された。ここでは、H地区でみられたような鉄器時代や青銅器時代まで遡る遺構は発見されていない。すなわち、これまでの調査で明らかになったように、青銅器時代からペルシア時代までの集落は、現在のバトルーン旧市街の北部にあったテル型遺跡に位置し、ローマ時代以降の集落はテルより南方に拡大していることを裏付けている。

さて、この地区には1960年代まで現代の住宅が建っていたが、現在は更地となっている。この土地の開発に伴い発掘調査が行われた。基本的な層序としては、5つのフェーズが確認できた。フェーズ1は、現代の住宅の基礎部分、フェーズ2は、レバノンの伝統的住宅の基礎、フェーズ3は、オスマン朝時代の建造物からなる。フェーズ4は、中世(14~15世紀)の文化層であり、最後のフェーズ5は、ローマ時代の文化層で、後述するように工房関係の建築遺構が確認できた。

フェーズ1は、現代の住宅の基礎部分であり調査区の三分の二の面積を覆っていた。この下から、19世紀のレバノンの伝統的住宅の基礎部分が出土した(フェーズ2)。この頃の住宅は、石組み壁で木造の天井部、さらに独特のレンガ色の瓦で屋根が葺かれてい



図3 I地区におけるローマ時代の出土遺構全景。一部オスマン朝時代の遺構が残る。

た。この基礎部分の下からは、オスマン朝時代の遺構が出土した(フェーズ3)。これらの主なものは、1)何らかの建造物に関連する複数の大型の石組み柱、および2)石組みのヴォールト天井をもつシスターン(水槽)が四基(1つは大型、3つは小型)から構成されていた(図2)。その下からは、建築遺構は出土しなかったものの14~15世紀に年代づけられる陶器が出土し、中世の文化層があったと考えられる。さらにその下からは、岩盤の上に構築されたローマ時代の建築遺構が出土した。これらは、工房関係の遺構からなっていた。まず、プラスターで内面がコーティングされた八基ほどの液体を満す施設があげられる。これらは床面とその周辺の壁の基底部が残されていた。さらに複数基の窯が検出された。その内最も残りの良い一基では、40cmの高さに壁が残存していた。

ローマ時代の文化層(図3)においては、調査区の西部で岩盤が低くなっていた。おそらくこの部分は、石切り場として石材の切り出しが行われたと考えられる。この時代の調査区は、都市の南端に位置し、城壁の外にあった「南港」に面する工房地区であったと思われる。この文化層からは、石組みで作られた東西に走る水路跡も確認されている(図4)。この水路跡の西側は、上述のヴォールト天井をもつオスマン朝時代の大型シスターンによって破壊されていた。また、調査区の西部からは、特異な窯が出土した。この窯壁周囲は、半分が砂利で補強されており、残りの半分が巻貝の遺体を充填したアンフォラで補強されていた(図5)。この窯の用途については今後詳細な研究が必要である。

出土遺物としては、大量の土器・陶器片以外に特筆すべき遺物はなかったが、ローマ時代の文化層からは



図4 | I地区ローマ時代の水路跡。



図5 | I地区ローマ時代の窯址。巻貝を充填したアンフォラが手前に見える。

大量のアンフォラ片やランプ片などが出土している。またルームウェイト、コイン、ガラス容器、金属器、骨角器なども見られた。またローマ時代の文化層からは、大量の巻貝の遺体も採取された。これらの巻貝は、アッキガイ科 *Murex* 属の貝 (*Bolinus bardaris*, *Hexaplex trunculus* など) であり、おそらく染色のための原料であった可能性が高い。すなわち、この工房址では織物の染色も行われたと考えられる。複数見つかった窯も、パン焼きや調理用の窯というよりも大部分は染色に関連するものであるかもしれない。今後の研究に期待したい。

この地区での出土遺構の大部分は、新たな住宅の建造により破壊されてしまう予定である。しかし、土地所有者と考古総局との交渉により、いくつかの出土遺構、特にローマ時代のもの(窯址や水路跡など)を移築して保存することとなった。その作業は、2021年9月15日から10月1日にかけて実施された。このような出土遺構を保存し、一般に公開する試みはレバノン



図6 | H地区調査風景。左奥が現代の土留め用石組み壁。

ではまだ珍しいことであり、バトルーン遺跡では二例目となる。最初の事例は、D地区の鉄器時代・ペルシア時代の出土遺構を保存して公開するという計画である。I地区で保存された遺構は、新たに建造される住宅の庭に移築され、一般公開される予定である。今後、このような出土遺構の保存がレバノンにおける文化遺産の保護活動に貢献できることを祈願したいと思う。

3. H区：鉄器時代の石切り場跡

この地区は、2020年の第6次調査で大規模な発掘が実施された場所である。昨年度報告したようにこの地区の岩盤の西端部で鉄器時代の石切り場跡(Sector D)が発見された。この地区の西端には、現代の土留め用の石組み壁がある。今回、開発のためにこの土留め用壁を撤去する必要がでてきた。実は、鉄器時代の石切り場跡は、完掘したわけではなく、住宅の建築に影響のない部分は、未掘のまま残されている。しかし、石壁の撤去により、石切り場の西側部分が破壊される危険性がでてきた。そこで、石切り場跡の北西部分を発掘し、石組み壁を撤去しやすくする作業を実施した(図6)。



図7 H地区鉄器時代石切り場跡出土のテラコッタ製マスク。

前回の第6次調査でも明らかであったが、石切り場跡の堆積には、大量の土器片をはじめとする「ゴミ」が約3mの厚さに堆積していた。この文化層は鉄器時代II期に年代づけられる。今回の調査で出土した遺物のうち特筆すべきものを2つ紹介する。まずテラコッタ製の仮面(マスク)である(図7)。このようなマスクは、さまざまなタイプがレヴァント地方沿岸部およびキプロスから出土している。バトルーン遺跡のものは、破片であるが、眉から鼻かけての部分と口の部分の2点からなる。テラコッタ製マスクは、鉄器時代のフェニキアの本拠地とその周辺でみられる特徴的な遺物であり、バトルーン遺跡のものもその事例に加えられることとなった。この発見以前は、ビブロスとアムリット(シリア)の間の地域でマスクは見つかっていなかった。このマスクは、空白地帯を埋める重要な資料となる。バトルーンの事例が他のマスクと異なる大きな特徴は、目や口が穿孔されていないことである。多くのマスクは人の顔に装着することを想定していたのか、目と口、ときには鼻孔が穿孔されている。しかし、バトルーンの事例はそのような穿孔はなく、ひょっとすると用途も多少違っていたのかもしれない。さらに年代も紀元前8世紀頃と考えられ、マスクとしては古拙な時期に属する。今後、詳細な研究を進めたい。

石切り場跡から出土した特筆すべきもう一つの遺物



図8 H地区鉄器時代石切り場跡出土のステアタイト製装身具鋳型。

は、装身具類の石製鋳型である(図8)。石材は、ステアタイトと考えられ、いわゆる2枚一組の鋳型(two-part stone jewelry casting mould)であり、発見されたのは1枚のみである。この特徴的な鋳型は、レヴァント地方の広い範囲で出土しており、主に後期青銅器時代が中心である。鉄器時代のものは、点数が少ないものの報告されている(例えば、Megiddo, Tel Beth Shean, Tell Fakhariyah)。これらが青銅器時代の「伝世品」の可能性も否定はできない。バトルーンの事例も出土コンテキストは、鉄器時代II期であるが、摩耗が激しく、割れ口も古い点を考慮すると、青銅器時代から伝わったものかもしれない。類似する鋳型は、レバノンでは唯一ビブロス遺跡から30点以上出土している。バトルーンの事例は、レバノンではビブロスに次ぐ2例目の遺跡となる。出土した鋳型には、5つの装身具の鋳型が彫り込まれており、今後、類例との比較が必要である。

4. 出土遺物の整理作業およびサンプリング

2021年8月には、レバノンにて出土遺物の整理作業および分析用資料のサンプリングが実施された。バトルーン遺跡の出土遺物は、そのすべてが考古総局トリポリ支局の倉庫に保管されている。考古総局の許可のもと、主にH地区の出土遺物について整理作業を実施した。時間の制約上、特に重要な鉄器時代の出土品を中心に写真撮影、実測が行われた。また分析用資料として、炭化物、動物骨、貝類、土器片などのサンプリングが行われた。分析は、主に日本で行われる予定である。

5. まとめ

2018年から始まったバトルーン遺跡の発掘調査も4年目を迎えた。遺跡のほとんどの部分が現代の住宅をはじめとする建造物でおおわれているため、どうしても調査は、土地の合間を縫って実施せざるをえない。それでもこれまでの発掘調査からそれぞれの時代毎の集落規模やその特徴についてある程度明らかにすることができた。

今回の調査では、都市の南端部の様相を明らかにすることができた。これまでの推測通り、都市の南部は、ローマ時代に居住が確立、ビザンツ時代からオスマン朝時代にかけて発展してきたことが確認できた。また都市の城壁の外には工房地区が広がっていた可能性が高い。I地区は、現在の海岸線から約100m内陸に入った場所にあるが、南方の「南港」の推定位置からは約80mの位置にある。いずれにせよ、海に近い位置に工房があったということは、当然、製品の輸出を視野に入れていた可能性が高い。ローマ時代のフェニキア地域の染色技術が実際どのようなものであったのかについては、まだ研究が充分ではなく、その意味でも今回の調査成果は、貢献できると考える。

H地区の石切り場跡の調査からは、さらなるフェニキア、あるいはレヴァント沿岸部文化の存在を証明する遺物を収集できた。これまで、鉄器時代の都市については、ビブロスとトリポリの間で考古学的証拠が報告されていなかった。バトルーン遺跡の成果は、この地もフェニキア文化の一部として確定できることを示している。

最後にバトルーン遺跡は、現代の住宅地が表面を覆っているとはいえ、たえず開発の危機に瀕している。レバノンの貴重な文化遺産を記録、保護、公開するために今後とも貢献してゆきたいと思う。

バトルーン遺跡の発掘調査は、レバノン大学、中部大学、および個人出資者からの支援を受けた。調査にあたっては、レバノン文化省考古総局局長 Sarkis el-Khoury 氏、同局北レバノン地区担当官 Samar Karam 氏、および在バトルーンの考古総局職員から多大なるご支援をいただいた。フィールド調査では、Muhammad Abdel Sater(レバノン大学)、Marc Yared (Wormhole 社)、Paula Abou Harb(Wormhole 社)、およびフリーランス考古学者の Hassane Ghaddar、Hiba Abdelrahman、Ralda Salamoun、Claude Jaber などの協力を得た。この場をかりて関係諸氏に厚く御礼申し上げます。

■参考文献

- ・ Abdul Massih, J. and H. Ghaddar 2021 *Final Report of the Archaeological Excavations in the Real Estate "Batroun 1462/Batrouni House"* (Report submitted to the Lebanese DGA, Nov 2021).
- ・ 西山伸一・ジャニン アブドゥル=マッシーハ 2019「レヴァント回廊の歴史を掘る—第4次(2018年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査—」『第26回西アジア発掘調査報告会報告集』114-118頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ジャニン アブドゥル=マッシーハ 2020「レヴァント回廊の歴史を掘る—第5次(2019年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』35-39頁 日本西アジア考古学会。
- ・ 西山伸一・ジャニン アブドゥル=マッシーハ 2021「レヴァント回廊の歴史を掘る—第6次(2020年)・フェニキアの港バトルーン遺跡の試掘調査—」『第28回西アジア発掘調査報告会報告集』41-46頁 日本西アジア考古学会。